

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第8回】宜昌作戦

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

「第一次宜昌作戦」

昭和十五年四月末に於ける敵情は、漢口西北正面に李宗仁を戦区司令官として第五戦区の部隊、右翼兵団（張自忠）を宜城、沙洋鎮間の襄河右岸に、一部を以って安陸北方山地に固守し、中央兵団（孫連仲）を以って信陽北方及び西方地区に配し、湯恩伯軍を南陽附近に予備として置き、別に揚子江に沿う地区に郭懺の指揮する江防部隊を配置して其の兵力総計約五十個師であった。

敵の冬季攻勢による損害回復に先立ち、之を撃破すべき命を受け、聯隊は四月二十四日より遂次兵力を黄家集附近に集結させた。

聯隊は奈良旅団長の指揮にて、奈良支隊となり長嶺方向より攻撃、師団主力は洋梓鎮附近より攻撃することとなった。

我が正面の敵は、顔家湾附近より長嶺附近に亘り陣地を占領し、特に呉家湾・長嶺附近は一連の既設陣地にして、要点は堅固なる掩蓋と数条の鹿砦等設け頑強に編成されていた。

聯隊は五月一日より敵前進陣地を駆逐、重点を右翼に保持し緊密なる歩砲共同の下に遂次敵陣地を奪取しつつ前進、第二・第三大隊・砲兵及び重火器部隊の奮戦により呉家湾・長嶺の既設陣地を攻略、更に執拗なる敵逆襲部隊を撃退して一意前進を続けた。

二日夕刻、潭家砦を奪取。三日第三大隊を基幹とする部隊を以って反転、高坡附近を掃蕩し更に北上、汪家店北方地区に於いて旅団後方部隊たる第二野戦病院・輜重隊及び前方梯団の一部が敵に前進を阻止されたため、直ちにこの敵を撃破し、更に急進し旅団に追及するや右翼隊となり張家集を迂回攻撃し之を奪取した。

五月五日、第三大隊・山砲一個中隊・迫撃砲一個中隊を指揮し、旅団の左側衛となり楊家棚付近に至り旅団の前衛となり、由家集警備隊救助の命を受け大泉附近に至るや、有力なる敵が両翼に迫り、第三大隊を以って之を攻撃、第一大隊・山砲一個中隊を以って警備隊を救援し、後第三大隊を併せ新街に進出、夜半旅団に追及、黄龍档に一部を残置し同地の警備をすると共に、七日夕遅く張家集に到着した。

聯隊は連日の強行軍に加えて、糧秣は少なくなり心身共に疲労困憊せるも、将兵の志気極めて旺盛にして意気衝天、まことに頼もしき限りであった。

八日早朝、旅団の右縦隊となり前進中、東方を縦隊で移動する敵を発見、前衛第二大隊をして正面より攻撃し、第三大隊を右より迂回包囲させ機先を制し之を攻撃、大なる損害を与え夜半三合鎮に到着。九日反転を開始し左縦隊となり十一日、耿家集に進出、南方山地内に潰乱彷徨する敵を随所に撃破しつつ同日由家集に進出した。

五月十四日、「師団の後方部隊が敵と交戦中なり」の報に接し、聯隊は救援を命ぜられ第二大隊主力・第三大隊山砲一個中隊・第五十八聯隊の半大隊を併せ、村井支隊となり耿家集方面に反転、一三〇〇九里崗附近に於いて南下して来た後方部隊を掌握し由家集に帰還した。敵は我が軍の南下を以って態勢復帰の時期と判断し、棗陽に向い急ぎ前進した。

軍は此の好機を捕捉し、敵を唐河左岸地区に誘致し、之を撃滅するに決し各部隊は十五日より行動を開始した。

聯隊は旅団中央縦隊前兵となり、十六日朝由家集を出発北進した。十九日一四〇〇、七房崗南方高地に於いて俄然南下中の敵と遭遇、機先を制し一挙に之を撃破、爾後敗敵に追尾し、老街附近に於いて抵抗する敵を一蹴し二十日、程家河を経て唐河右岸の敵を撃破渡河、更に一六〇〇李家榮附近の白河も渡河した。

五月二十一日、右縦隊前兵となり支馬崗附近に於いて、退却中なる敵縦隊に猛射を浴びせ之を潰走させ、同日夕刻姚家店到着、我が騎兵隊が約五百名の敵と交戦中なるを以って一部をして之を救援した。

二十二日、反転の為部隊は後衛後兵となり前進、梁家集以後第三大隊主力を以って旅団の前衛となり、清潭に向い前進中「有力なる敵は呉家湾に向い前進中」との情報に基づき急進、一〇二〇呉家湾を先取りし、更に清潭北方の微弱なる敵を撃退し清潭を占領した。

二十六日朝、旅団先遣隊となり茅茨畷に向い前進、清和店附近より所在に抵抗する敵を撃破し、同日一七〇〇茅茨畷に突進、南下敗退する敵一千を潰走。

二十七日、第一・第三大隊主力を以って旅団の前衛となり、茅茨畷南方二キロの地点に抵抗する敵を突破疾駆、一二〇〇長崗店に突進之を占領した。

翌二十八日、第一・第三大隊を基幹とし、旅団の左翼隊となり敵の右翼を包囲攻撃を命ぜられ、目黒求北側高地に至るや、敵の大部隊が朶三坡より大洪山の奥深く遁入しつつあることを知り、第二大隊を南側高地に進出させると共に、左第一線の第三大隊の包囲と相俟って、敵の側背を席捲きし三里峽の線に進出した。

かくして、敵二十九集團軍は大洪山の奥深く遁入。凱歌は谷々にこだました。斯くして襄東平地に於ける作戦行動を終わり、各部隊は二十九日より、新作戦発起地点に向った。

聯隊は張家湾附近に集結し、次期作戦の準備を実施した。

「第二次宜昌作戦」

昭和十五年五月末に於ける敵情は、漢水左岸において大打撃を受けた、第三十三集團軍及び第四十一軍等は、襄陽以南漢水右岸に後退し河岸の防備に就き、鄧縣老河口方面に遁走した第八四軍・第七五軍・第三十軍等は部隊の整理中であつた。南陽方面に敗走後遂次桐柏方面に移動した湯恩伯集團軍は、同方面にあり第九二軍・第九四軍を併せ指揮し、主力は桐柏・西新集・天河口附近にあり、我が兵站線の截撃を企図していたが、我が威力に承伏し大なる積極的行動はなかつた。

大洪山系内の第二九集團軍・第四五軍等は、我が軍の攻撃により大打撃を蒙り山地内に遁走潜伏し、漢水右岸に於いては河岸の既設陣地を利用して、北方より十数個師を排列し且第九戦区方面より一部の兵力を転用し、宜昌方面の防備に充てていた。

聯隊は五月三十一日、洋梓鎮東方地区に兵力を集結し、師団命令に依り一部（第一大隊）を後方連絡線確保のため應城附近に派遣すると共に、主力は敵の牙城宜昌攻略の為極度の疲労も回復の暇なく、しかも企図秘匿のため極力夜行軍を以って六月三日払暁、苗口鎮東方十五キロ、鄭家橋附近に集結を完了し補給及び給養に努め、至短時間に渡河作戦の準備の完璧を図った。

六月四日、折りからの風塵を利用して更に集結地を推進、夕刻渡河点の長台に進出、諸準備を完成し将兵の志気昂然として満を持した。この日聯隊長は、中隊長以上の幹部を従え、渡河点に至り現地に於いて企図並びに、細部の指示を実施した。

主力は一六〇〇渡河点に到着。聯隊は渡河に当たり旅団（左翼隊）の第二線部隊となり渡河攻撃すべき任務を受領した。

五日〇一〇〇渡河作業隊協力の下に奇襲渡河を開始した。天佑とも言うべきか、時に月なく敵も殆ど気付くことなし、僅かにメクラ射撃をして来るのみで、聯隊は予定の如く渡河成功、〇九三〇張家場に進出した。

爾後旅団の右第一線となり、雞鳴嘴高地既設陣地に抛る敵を駆逐し、一挙に同高地南端に進出。六日独立機関銃隊・山砲一個中隊・軽迫一個中隊を増加し攻撃を続行、棗林崗に進出し爾後旅団の右追撃隊となり、七里店～十里舖～川心店を突破西進した。

八日、師団の中央左縦隊となり、正午頃沮潭河を急襲渡河し宜昌東西第一線陣地竜王廟を攻撃、湿地帯を障害とし頑強に抵抗したが、聯隊は第三大隊を右第一線、第二大隊を左第一線とし重点を右に指向して湿地帯を強行突破。同日夕刻遂に此の堅陣を奪取、続いて周家湾附近の要点を奪取した。

此の戦闘に於いて、第三大隊長天野少佐は奮戦中再度の負傷をして遂に後送された。

九日、丁家畷東側地区に約四～五百の敵を発見し、飛行機の緊密なる協力の下に之を包囲撃滅した。

十日、所在に残敵を撃滅しつつ急進を続行。

翌十一日一一〇〇、臨江溪に達し一般の敵情判断に基づき直ちに独断判断渡河を決行し白馬廟・求雨台高地を占領、待望の宜昌を目前に控え、聯隊長以下全員愈々緊張、鉢巻もきりりと破竹の勢いを以って前進、前面の敵情を偵察すると共に揚子江を眼下に見下ろし一同志気益々上がった。一三〇〇既設陣地に抛る頑敵を歩・飛共同により撃滅しつつ敵中深く突貫し、一六二〇第三大隊は他部隊に先んじて宜昌の一角を占領した。

更に十二日未明、市街に突入、建築物に抛り執拗に抵抗する敵に対し、壮烈なる市街戦を演じつつ掃蕩を実施。一二二〇聯隊長は軍旗を奉じて堂々の入城し、翌十三日完全に此処を占領確保した。

五月一日作戦開始以来、炎熱の下大洪山系を踏破し、漢水の濁流を渡り、沼沢を抜渉し、破壊された道なき道を進撃し、懸軍実に一千キロ。この間卓越した我が統率の妙と神速なる機動により、敵第五戦区五十万の精鋭軍を潰滅し、克、軍の作戦所期の目的を完遂した。

六月十九日、北方に於ける情勢切迫により、聯隊主力（第一大隊欠）は敵を北方に撃退した後警備を担当したが、此の戦闘に於いて我が第二大隊長石川少佐は率先陣頭に立ち、血戦数合執拗なる敵の逆襲を悉く撃退したが、〇四三〇頃最後の敵逆襲を潰滅せんとした時、不幸にして左側頸動脈貫通銃創を受け、壮烈なる戦死を遂げた。

七月七日聯隊は、戦車隊等の配属を受け師団の左翼隊となり、將軍岩・南天山の既設陣地に抛る頑敵を攻撃、八日二〇五〇將軍岩を奪取、続いて南天山に進出し一部を以って梯子岩を占領した。

九日第二大隊をして、昼間長橋溪の敵前無血渡河を敢行し、一挙に西陵山の線に突進之を確保した。

七月十日以降聯隊主力は宜昌の直接警備を命ぜられ治安の維持回復に努める事となった。

「宜昌附近の警備」

宜昌作戦終了後、師団は七月中旬より堅固なる警備態勢をとり、重点を宜昌とし主力を以って周辺要線を確保し、一部を龍泉舗及び鴉鵲嶺並びに兵站線の要点を占領し警備に任じた。

聯隊は主力を以って宜昌に位置し、同地を警備、第二大隊を以って騎兵第十七大隊長の指揮下に入れて、雷家沖の警備に任せしめた。

八月六日、師団の部署変更と共に村井聯隊長は鴉鵲嶺地区警備隊長となり、十二日引継ぎを完了。第三大隊を双連寺、第二大隊の一部を軍公路上の要点に派遣し、主力は鴉鵲嶺に位置して鋭意戦力の更張を計った。

三十一日、石子嶺附近に侵入した約五百の敵を、第二大隊を基幹とする部隊を以って討伐、交戦一時間の後潰走させた。爾後積極的討伐、或いは帰順工作、或いは不断の搜索等により敵の蠢動を封じていたが、敵約五個団揚子江を渡河、安福市南方地区に侵入したとの土民の報に接し、第二大隊を此の敵に当たらせ、旅団直轄であった第一大隊を復帰させ、此の敵を掃蕩、第二大隊は五日、老鴉店子附近に陣地占領中の約一千の敵と衝突、交戦二時間の後敵を東南方に潰走した。

聯隊は六日〇二〇〇鴉鵲嶺出発、安福市にて第二大隊を掌握、更に梅家沖・三界場・廣仁橋・大和場を掃蕩、途中敵と遭遇することなく七日一五〇〇鴉鵲嶺到着、旧態勢に轉移し警備任務を続行した。

十二月、師団は警備地区を変更したため、聯隊は第一大隊を依然旅団長の指揮下に残し、主力は新たに南地区警備隊となり、十三日第三大隊を董市に、第二大隊を態家湾に、聯隊主力は紫金嶺に位置し夫々警備に任じた。

其の兵力は、歩兵第百十六聯隊（第一大隊二中隊欠）・独立山砲兵第三聯隊第一大隊・工兵第十三聯隊第二中隊の一個小隊・第九師団第七兵站輜重兵中隊・衛生隊六分の一・防疫給水部の一部であった。

（参考文献「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より）